

災害時における若手臨床検査技師の役割と成長

能登半島沖地震の事例

◎阿部 拓也¹⁾、渡邊 博昭¹⁾
新潟医療福祉大学 医療技術学部 臨床技術学科¹⁾

【背景】災害発生により、被災地では生活基盤の回復や支援が急務となる。令和6年1月1日16時10分に発生した能登半島沖地震でも大規模な被害が発生し、住民の生活が脅かされた。一方で、支援活動は全ての地域に均等に届いているわけではなく、医療支援においても不十分な現状である。臨床検査技師による支援は注目されているが、実際の支援業務のニーズは日勤から当直まで幅広い支援が必要となる。特に若手技師は技術的な能力と経験の不足などの課題もあり、被災地支援に手を挙げる機会が少ない傾向にある。今回、実際に若手技師が被災地支援に赴き、従事した活動内容と課題について報告する。

【方法】生理検査を主体とした臨床経験10年未満の技師が被災地病院にて医療支援を行った。業務内容は、日勤帯に生理検査（心電図，心エコー），検体検査（一般検査，血液検査，生化学検査，免疫検査，細菌検査），当直帯に検体検査（一般検査，血液検査，生化学検査）を行った。支援期間は3日間である。

【結果・考察】臨床経験が10年未満の臨床検査技師でも、日当直が可能な知見と技術を持っていれば、被災地支援で重要な役割を果たせることが分かった。能登半島沖地震の被災地では、現地の臨床検査技師も自身の家庭が被災しており、経験豊富な人材ではなく、1人でも多くの人手が求められている。若手技師は、被災地という厳しい環境に身を置くことで、実務能力や業務意識を大きく向上させることができた。また、自身の地域が被災地となった場合に必要な医療体制をより具体的にイメージする力も養われた。一方で、幅広い臨床検査業務に対する関心と所属先の理解が得られなければ実現しないため、所属全体の意識改革の必要性があると考えられる。

【結論】本報告により、被災地医療支援に対する若手技師の関心を高めると共に、彼らの成長を促進し、臨床検査技師の社会的価値を向上させることに繋がると考えられる。

連絡先：takuya-abe@nuhw.ac.jp

福島県血液検査部門における技師教育の現状と今後の展望

◎安藤 菜緒美¹⁾、渡邊 友里耶²⁾、松下 志保³⁾、菅野 喜久子⁴⁾、中村 美雪⁵⁾
公立岩瀬病院¹⁾、いわき市医療センター²⁾、公益財団法人 星総合病院³⁾、福島県立医科大学附属病院⁴⁾、太田総合病院附属太田熱海病院⁵⁾

【はじめに】臨床検査技師は刻々と進歩する医療技術や治療に対応するため最新の知識を習得し日常業務で発揮することが求められる。そのため研修会や学会等学ぶ環境が必要とされ、それらが施設間の交流の場にもなっている。本学会では福島県血液検査部門の研修会開催の現状と今後の展望について報告する。

【研修会実績】福島県の血液検査部門は血液検査分野と染色体検査分野から構成される。血液検査や疾患に関連する研修会を毎年開催し、精度管理委員と連携した内容もとりいれている。過去5年間の研修会の内容について示す。令和元年度は対面方式で精度管理フォローアップ研修、講演、グループディスカッションを行った。令和2年度はCovid19感染流行に伴い中止。令和3年度以降はWebによる研修会が定着し、3年度は講演のみの開催。令和4年度は検査血液学会東北支部学術委員会との共催として初級者対象の症例ディスカッションを2回、全員対象の精度管理調査フォローアップ研修とWHO分類第5版の簡単な紹介を含めたMDSの症例提示を実施した。令和5年度はCovid19感染症

が5類に引き下げられたため対面での開催を検討したが定期的な問題から断念し、9月に講演3題、2月に症例提示と解説、医師による講演をWebで開催した。

【考察】Covid19感染流行を契機に研修会の開催様式も大きく変化した。Webが主流となり参加し易くなった一方、顔を合わせる事が少なくなり施設間の関係性が希薄になることが懸念された。特に血液検査部門は細胞観察が不可欠であり細胞の分類や報告に迷う例も多く遭遇する。細胞観察は技師の目に委ねられるため患者さんがどの施設を受診されても同様の結果を提供するためには相談できる体制作りが急務である。今後は経験年数や施設の規模に応じた開催も検討している。回数も増えるため講師の選出や内容の工夫など課題は多いが、次世代育成のためにも若手から中堅技師に積極的に関わってもらうことで学術活動の活性化を図っていければと考えている。

【まとめ】様々な課題はあるがWebと対面方式それぞれの利点を活かし多くの施設の方に参加していただけるよう取り組んでいきたい。 連絡先 0248-75-3111

生理検査における臨地実習のフィードバック

◎浅黄 優¹⁾、三木 未佳¹⁾、情野 千文¹⁾、船水 康陽¹⁾、工藤 由美子¹⁾、三木 俊¹⁾
東北大学病院 生理検査センター¹⁾

【背景】当院では例年、東北大学保健学科の臨地実習を受け入れている。4ヶ月の実習期間のうち生理検査は2週間割り当てられ、当センターでは大学病院ならではの特徴を生かして肺循環、超音波、脳神経（てんかん科含）、感覚器部門を効率的に回れるようカリキュラムを組んでいる。実習時は部門ごとの受入れ人数を小さくし、指導者側の負担軽減とより密な指導体制を構築している。さらに近年では質の向上も視野に入れ、実習後の学生らにフィードバックを求めている。今回フィードバック内容を解析したところ、臨地実習に対する学生らの期待項目が明確化し、今後の指導の参考となる結果が得られたので報告する。【対象・方法】対象は2020年～2023年の期間中に当センターで臨地実習を行った東北大学保健学科3年生である。実習最終日に全体の評価や指導方法、生理検査に対する意識について選択肢回答法を用い、紙媒体またはGoogle Formで回収した。【結果】過去4年分の解析の結果、毎年同様の傾向を示しており例外は認められなかった。実習全体の評価は95%以上で良好だった。指導方法については実技・講義の balan

スが良く、多様な実習内容に満足度が高かった。一番勉強になった部門は脳神経が過半数を占めていた。教えてほしかった内容は就職先などの検査技師の将来像が求められていた。生理検査に対しては実習によって勉強の意欲が湧いた、好きになったといった回答が多かった。【考察】当センターにおける臨地実習は全体として高評価であり、学生らのモチベーションアップのきっかけとなっていた。生理検査は知識だけでなく検査技術が必要不可欠である。そのため、講義と実技の両方を組み込んだ現指導内容が高い満足度に繋がったと推測される。勉強になった部門として脳神経が選択された理由は他部門に比し、実習前の苦手意識が強いためと考えられた。また、技師の将来像について強い関心が寄せられた背景には臨地実習が3年次であり、進路選択を模索する学生らの様相が伺えた。臨地実習は学内とは異なり、臨床現場の強みを生かした指導に価値がある。今回の結果から検査知識や技術のみならず、多様な技師像に関する情報提供も有意義な臨地実習の一部となり得ることが示唆された。（連絡先：022-717-7385）